



東京YMCA

2015 9 月号

発行所 公益財団法人東京YMCA 発行人 廣田光司
135-0016 東京都江東区東陽2-2-20 電話 03-3615-5562

URL <http://tokyo.ymca.or.jp>

東京YMCAの使命

東京YMCAは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体的全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。

グローバル時代のYMCAを考える

「彼ら」と出会い、「私たち」の輪を広げよう

We build strong kids, strong families, strong communities. YMCAは、たくましい子どもたち、家族の強い絆、支えあう地域社会を築きます。

YMCAは世界119カ国で活動する青少年団体として、古くから国際協力活動や国際教育をしています。グローバル化が進み、「国際人の育成」に関心が高まる中、YMCAが目指す「グローバルシチズン(地球市民)」とは何か? 日本YMCA同盟の「地球市民育成プロジェクト」のアドバイザーを務めている浅羽俊一郎さんと共に考えました。



あさば しゅんいちろう 浅羽 俊一郎 さん

UNHCR(国連難民高等弁務官事務所)元パキスタン・クエッタ事務所長。元東京YMCA職員。カンパニング「ズンゴロ節」の作詞作曲者でもある。現在は東京YMCA国際委員、日本YMCA同盟の常議員などとしてYMCA活動を指導。

写真は、右手で「W」と「e」を表している。「これからは、We(私たち)」ではなくて、

ムや場、あるいは出会いによって、人が変わっていく。もちろん、すぐに変わる人もいれば何年も経って気づいたら変わっていたという人もいます。そしてその人たちが社会を変える力になっていくと思うのです。

以前行われたバングラデシワークキャンプの参加者は20年近く経った今も自主サークルを作った支援活動が続いています。それまで遠い存在だった国と出会い、価値観が変わっていったのです。

国内のキャンプでも、子どもやリーダーが皆さんの出会いや体験の中で変わっていきます。私もその一例です。語学教育でも、語学力の習得だけでなく、異文化を知り、世界を見る目が変わっていく。生き方が変わることもあります。

今、国際交流も、語学教育も、さまざまな他団体が類似プログラムを実施しています。その中でYMCAは、ただ体験したり学んだりするだけでなく、人と人が出会い、変わっていくきっかけとなるようなプログラムを提供していく。そんなYMCAの力や特色をよく自覚してプログラムを提供していくて欲しいと思います。

「彼ら」と出会い「私たち」になる
—— 昨年の世界YMCA大会などで「We-ing」(ウィーイング) / 私たち

難民支援で設立したYMCA経験
—— 浅羽さんは74年から83年まで東京YMCAの職員として勤務した後、84年〜07年までUNHCR(国連難民高等弁務官事務所)で難民支援にたずさわりました。具体的にはどんなお仕事をされたのでしょうか?



2014年の世界YMCA大会(米コロラド州)でも浅羽さんは「We-ing」を提案。グループメンバーも共感し、800人の参加者の前で寸劇を披露した。

—— 11年からは東京YMCAの国際委員などとしてYMCAをサポートしてくださっています。
—— UNHCRでは、国籍も生活背景も異なる人たちと議論し、協力しながらプロジェクトを遂行しましたが、その際にYMCAでの経験がすごく役にたちました。今はその恩返しのために関わっています。

もともと私は小学生時代、父の仕事でニューヨークに住んでいた時に初めて現地のYMCAのサマースクールに参加しました。中学生の時には東京YMCAのキャンプ「野尻学荘」に参加。クリエイションやカンパニングを覚え、人前に立つ経験をjする中で、引退込み思案だった自分が変えられ、人と関わりた

いという気持ちが増え、た、と思っています。また職員になってからは会員やリーダー、講師など、いろいろな人たちに揉まれました。異なる立場の人たちと出会い、一緒にプログラムを運営していくグループワークの苦労や楽しさを経験したことが、UNHCRで働くときの大きな力になりました。

YMCAには人を変える力がある

—— 12年と13年にはバングラデシYMCAの視察と協議に行かれましたが、YMCAの国際活動に期待することは?

—— YMCAは直接的な社会運動や政治運動はしないけれども、「人を変え、その人が社会を変えていく」、そういう団体だと思っています。YMCAが提供するプログラ

ちの輪を広げる(を提唱して)していますね。
—— 「We-ing」や、「We(我々)」対「They(彼ら)」という対立的な見方を辞めて「我々の輪を広げよう」という意味です。辞書にはない造語です(笑)。でも、世界YMCA大会では各国の皆さんの参加者が賛同してくれました。

世界の貧困問題、教育格差、民族間の対立も結局「我々」対「彼ら」という単純な対立的思考枠から抜け出せていないように思います。当然相手から見ても「彼ら」は「彼ら」になります。今日、地球温暖化のようなグローバルな課題はこれでは解決できません。

私の提案は簡単です。こちらから「彼ら」に歩み寄り、同じ土俵に立つようになれば、「彼ら」は「You(君たち)」です。さらに一緒に行動するようにすると、「Let's」です。「彼ら」という発想がなくなると一回り大きくなった「我々」になっている。これが「We-ing」です。

要するに「私たちから相手に声をかけて、仲間になろう」。それをYMCAから実践しよう、という事です。

「グローバル人材」と地球市民
—— 日本YMCA同盟の地球市民育成プロジェクトでアジアの若者たちにアドバイスなさってますが、地球市民とはどんな人でしょうか?

—— 浅羽さんは人道支援活動にも力を入れてらっしゃいます。
—— 災害時の人道支援には、たとえば「国境なき

医師団」ように、短期間で緊急救援活動をする団体もありますが、YMCAは中長期的に人々の絆を強め、チームワークを育てる団体ではないかと思えます。つまり人道支援でも、「私たち」の輪を広げる働きが期待されていると思うのです。

私は11年夏、東京YMCAの専門学生たちと石巻で、家屋の泥かきをしました。2日目に学生の一人が、家の主人から母親を亡くした状況を聞いた、と夜の集会で涙ながらに語りました。こういうのがYMCAの人道支援活動でしょう。ただ単にガレキを撤去して泥かき作業をするのでは違う。地元の人たちに歩み寄り、痛みを知る。相手の話を聴き、一緒に行動しようとする。こういう支援は、支援した側も変わります。

昨今、行政もNPOも人道支援体制が整備されていますが、YMCAも全国レベルで人道支援戦略を研究し、青年ボランティアチームを育てたらいいのでは、と私は思います。

聖書の「良きサマリア人」のように、敵対関係にある外国人に自ら歩み寄り、支援していく。「彼ら」と出会い、「良き隣人」となり、課題に向き合う。それが現代のグローバル社会にもっとも必要な「地球市民」だと思います。

東京YMCA創立100周年のときの標語「世界を見つめ、地域に生きる」は当時とても新鮮な印象を持ちました。が、あれから35年、今は「見つめる」だけでなく、もう一歩積極的に出ていくべき時代になっているのではないのでしょうか。

事業の内容も規模も変わりましたが、首都東京にあるYMCAとして、もっと会員やボランティアの層を広げて養成し、持てる力を存分に発揮していって欲しいと期待しています。
(聞き手・文) 広報室

30年前、東京多摩のちの電話が開局した。立川YMCA(現・西東京センタ)の片隅で、開局準備を始めて2年後のことだった。狭い会館の中で、ボランティアリーダーと、いのちの電話のボランティアとが肩を寄せ合っていた。開局に向けての資金作りバザーは、YMCAの会員とリーダーが協力した▼時が流れて30年、休むことなく続いた相談。およそ900名の電話相談員が受けた電話の数は、延べ45万回を超える。どれだけ「いのち」を救うことができたか、実態を知る術はないが、希望が与えられ、立ち上がる勇気をつかんだ人は数知れないであろう▼今秋、チャリティーコンサートを開く。30年前は、チャリティー絵画展を行った。あの時も多くのYMCA会員に支えられた。今秋は天満敦子さんのバイオリンコンサートである▼30年間、この活動を支え続けた東京YMCAの先輩方と同様に、これから、いのちを見つめ、いのちを守り、社会の片隅に光を灯す活動と共にありたい▼いのちの電話の源流「サマリタンズ」は、ロンドンから始まり、世界に広がった。深い因縁を感じるこの運動の「良き隣人」でありたいと願う。(芝浦アイランド館長 鶴清忠)

東日本大震災 5年目の夏

■草刈・農作業などお手伝い

山手センター高校生ボランティア (8月17日～19日)

山手センターの高校生グループ「カラフル」と彼らの呼びかけで集まった高校生13人が参加。石巻や女川を視察した後、石巻の子育て支援センターで草刈および乳幼児の遊び相手、ぶどう農家の農作業手伝い、宿屋の清掃などをしました。作業はいずれも教えていただくことの方が多く、どちらがボランティア？といった様子でしたが、現地の方々は元気な高校生たちをととても歓迎してくださり、「若い人には被災地に来て、この未曾有の災害を知り、後世に活かしてほしい」と話してくださいました。

現地の方々とのふれあいが高校生たちの心に届き、振り返りの時間には、涙する場面もありました。気持ちを分かち合えたり、元気を届けられたことが高校生たちの成果だったのではと思います。

(山手センター 岡田ナスカ)

■高齢者グループホームでレク活動

医療福祉専門学校 (8月19日～22日)

日ごろ介護福祉などを学ぶ学生6人が、石巻のグループホーム「長寿の郷・広渕」を訪問。認知症の利用者さんと共にゲームや歌、散歩などのレクリエーションをしたほか、ちぎり絵を作成しました。震災前このホームは、クジラ漁で有名な石巻市鮎川浜にあったことから、クジラと鳩を表現しました。学生たちは持ち前のやさしい心を存分に活かして交流することができ、いつもは表情が少ないといわれる利用者さんも、幸せそうな表情を見せ、帰り際には「また来てね」と別れを惜しんでくださいました。私たちは被災地の声を広く伝え、この活動を後輩につないでいきたいと思っています。



震災前このホームは、クジラ漁で有名な石巻市鮎川浜にあったことから、クジラと鳩を表現しました。学生たちは持ち前のやさしい心を存分に活かして交流することができ、いつもは表情が少ないといわれる利用者さんも、幸せそうな表情を見せ、帰り際には「また来てね」と別れを惜しんでくださいました。私たちは被災地の声を広く伝え、この活動を後輩につないでいきたいと思っています。

(医療福祉専門学校 林 恵子)

■小学生の水泳指導／障がい児レクリエーション

社会体育・保育専門学校生

(水泳：7月21日～25日／障がい児：7月27日～30日)

今年もまた社会体育・保育専門学校生たちは、被災地の子どもたちに笑顔をプレゼントしたいと、石巻小学校の水泳指導と、近郊の障がい児を対象としたレクリエーション「石巻ニコニコデイキャンプ」を実施しました。水泳指導には、水泳のインストラクターを目指して勉強をしている学生など10人が参加。延べ487人の小学生たちと思いつき水泳を楽しみました。

また「障害児スポーツゼミ」(指導：及川栄子先生)の11人の学生たちは、春から下見をして準備し、ミニ運動会や工作などを行ないました。子どもたちだけでなく保護者の方にも楽しんでいただくことができました。

(社会体育・保育専門学校 佐治克彦)

■コミュニティースペースの施設整備

国際ホテル専門学校 (7月9日～12日)

国際ホテル専門学校ホテル科2年生9人は、石巻の方々が立ち上げたコミュニティースペース「百俵館」で裏山の竹林伐採やエントランスの石畳固定作業などをお手伝いしました。ちょうどインターンとして来日していたアメリカの高校生と交流する場面もありました。ホテル専門学校は、これまで計12回にわたって石巻ワークキャンプを行なってきました。作業の内容は変化してきていますが、まだまだ継続の必要性を感じています。来季もまた、卒業生・講師から寄贈されたオレンジのつなぎを着て、作業をしたいと思っています。(国際ホテル専門学校 浦崎暁子)



■リフレッシュキャンプ

8月7日～9日 (妙高高原ロッジ)

「YMCAリフレッシュキャンプ」は、今年度も三菱商事(株)の協賛により毎月1回程開催しています。2011年からこれまでの開催数は60回となり、参加者数は延べ2000人を越えました。今夏には上記日程で、福島の子育て支援センターからボランティアリーダーたちと思いつき遊び、「虫がたくさんとれた」「水遊びが楽しかった」「歌をたくさん歌えて楽しかった」など、うれしい感想をいただきました。(山手センター 沖 利柯)



帰国の朝のホストファミリーと高校生たち(写真上)。送別会ではティラー先生のお母様が「日の丸のケーキ」を焼いてくださった(右)



7月28日～8月5日、「ティラー・アンダーソン記念基金・YMCA青少年国際交流プログラム」が行なわれ、東京YMCAスタッフ2名引率

石巻の高校生8人が訪米

ティラー先生の遺志を継ぎ、日米交流

のもと、公募によって選ばれた石巻市内高校生8名を米国バージニア州リッチモンド市に派遣しました。

このプログラムは、石巻市内で若くして津波で犠牲になった英語教師ティラー・アンダーソンさんのお父様が米国リッチモンドYMCAの理事であつた縁から、ご遺族が中心となつて設立した同基金と東京YMCAが協同し、2012年より行なっています。12年はティラー先生の教え子であつた石巻市内中学生7名をリッチモンドへ派遣し、14年は同市の高校生7名を石巻に招き、交流

を続けています。同基金は「石巻の子どもたちの教育に寄与したい」というティラー先生の遺志を受け継ぎ、石巻市内の学校に文庫を寄贈したり、奨学金を授与したりと精力的に活動しています。

期間中5日間、リッチモンド市内9家族がホームステイ受け入れをしてくださいました。日中はリッチモンドYMCAのデイキャンプに招待いただき、広大なキャンプ場でボートやアルペンクライミング等のアクティビティを楽しみ、現地の子どもたちと交流。石巻の高校生たちはお礼として「よきこいソーラン節」

のパフォーマンスを披露し、会場は大盛り上がりでした。最終日にはティラー先生の自宅にお招きいただき、大規模なフェアウェルパーティーが催されました。父アンディさんは娘ティラー先生との思い出の品を参加者に見せながら、「私たちは娘を津波で亡くしたけども、日本のことが大好きなんだ。娘は子どもの頃から読書が大好きで、本を読むことで日本に興味を持ち、日本で英語教師になるという夢を叶えたんだ。みんなも夢を持つことを大切にしていまし

た。参加者たちは、娘を失つたご遺族の「痛み」も受け取りましたが、同時にティラー先生の夢を共に実現することで遺族をサポートしようと努める、ホストファミリーやコミュニティの「愛」も受け取ることができました。今も困難な状況にある石巻の青年たちを、家族の一員であるかのように暖かく受け入れ、励まし、献身的にもてなしてくれたホストファミリーやアンダーソン一家。また期間中、高校生たちにも、日本のことが大好きなんだ。娘は子どもの頃から読書が大好きで、本を読むことで日本に興味を持ち、日本で英語教師になるという夢を叶えたんだ。みんなも夢を持つことを大切にしていまし

た。参加者たちは、娘を失つたご遺族の「痛み」も受け取りましたが、同時にティラー先生の夢を共に実現することで遺族をサポートしようと努める、ホストファミリーやコミュニティの「愛」も受け取ることができました。今も困難な状況にある石巻の青年たちを、家族の一員であるかのように暖かく受け入れ、励まし、献身的にもてなしてくれたホストファミリーやアンダーソン一家。また期間中、高校生たちにも、日本のことが大好きなんだ。娘は子どもの頃から読書が大好きで、本を読むことで日本に興味を持ち、日本で英語教師になるという夢を叶えたんだ。みんなも夢を持つことを大切にしていまし

た。参加者たちは、娘を失つたご遺族の「痛み」も受け取りましたが、同時にティラー先生の夢を共に実現することで遺族をサポートしようと努める、ホストファミリーやコミュニティの「愛」も受け取ることができました。今も困難な状況にある石巻の青年たちを、家族の一員であるかのように暖かく受け入れ、励まし、献身的にもてなしてくれたホストファミリーやアンダーソン一家。また期間中、高校生たちにも、日本のことが大好きなんだ。娘は子どもの頃から読書が大好きで、本を読むことで日本に興味を持ち、日本で英語教師になるという夢を叶えたんだ。みんなも夢を持つことを大切にしていまし

た。参加者たちは、娘を失つたご遺族の「痛み」も受け取りましたが、同時にティラー先生の夢を共に実現することで遺族をサポートしようと努める、ホストファミリーやコミュニティの「愛」も受け取ることができました。今も困難な状況にある石巻の青年たちを、家族の一員であるかのように暖かく受け入れ、励まし、献身的にもてなしてくれたホストファミリーやアンダーソン一家。また期間中、高校生たちにも、日本のことが大好きなんだ。娘は子どもの頃から読書が大好きで、本を読むことで日本に興味を持ち、日本で英語教師になるという夢を叶えたんだ。みんなも夢を持つことを大切にしていまし

た。参加者たちは、娘を失つたご遺族の「痛み」も受け取りましたが、同時にティラー先生の夢を共に実現することで遺族をサポートしようと努める、ホストファミリーやコミュニティの「愛」も受け取ることができました。今も困難な状況にある石巻の青年たちを、家族の一員であるかのように暖かく受け入れ、励まし、献身的にもてなしてくれたホストファミリーやアンダーソン一家。また期間中、高校生たちにも、日本のことが大好きなんだ。娘は子どもの頃から読書が大好きで、本を読むことで日本に興味を持ち、日本で英語教師になるという夢を叶えたんだ。みんなも夢を持つことを大切にしていまし

た。参加者たちは、娘を失つたご遺族の「痛み」も受け取りましたが、同時にティラー先生の夢を共に実現することで遺族をサポートしようと努める、ホストファミリーやコミュニティの「愛」も受け取ることができました。今も困難な状況にある石巻の青年たちを、家族の一員であるかのように暖かく受け入れ、励まし、献身的にもてなしてくれたホストファミリーやアンダーソン一家。また期間中、高校生たちにも、日本のことが大好きなんだ。娘は子どもの頃から読書が大好きで、本を読むことで日本に興味を持ち、日本で英語教師になるという夢を叶えたんだ。みんなも夢を持つことを大切にしていまし

子育てコラム



高層マンション街の子育て

先日、地域の保健所による母子の状況と子育て支援を考える集まりに参加しました。オリーフ保育園のある江東区東雲は、今後20年の間に都内で最も人口が増加すると予想されており、全世帯の8割が集合住宅に住み、核家族が多く、半数以上がワーキングマザーであるという、都市部の傾向がさらに進んだ形で見られる地域です。ほかの地域からの転入者が多く、知り合いがいないため、孤立しやすい

という課題もあります。そういった状況で聞こえてきたのは、「仕事に忙しくて子どもと関わるのができない」という父親の状況や、「マンションから外に出るのが心配で、産後3か月間ずっと家の中にいました」「仕事と違って、育児は答えがみえず辛い」という母親の声です。特に異なる地域ではありますが、この保護者の声は日本中から聞こえてくる声ではないでしょうか。保育園は様々な家庭環境の子どもたちを育むと共に、こうした保護者の支援も行なっており、色々な心配や悩み等を相談する機会が用意されています。

今年4月に「子ども・子育て支援新制度」が施行されました。保育園の入園要件も「保育に欠ける」から「保育が必要な児童」に変更され、家庭で子育て中の方も保育園を利用できるなど、育児が孤立しないために保育園も協力していく方向が示されました。

7月にオリーフ保育園で「夕涼み会」を催しました。地域の児童館にチラシを置くなどして参加を呼びかけたところ、卒園児や地域の子どもたち80人以上が遊びに来てくれました。保育園の子どもたちと一緒に、ヨーヨー釣りや盆踊りに参加してとても楽しかったとの感想がありました。園児だけでなく、地域全体の子育て支援施設として、必要とされる働きができるよう、地域に目を向けていたいと思います。

興津 夏子
(YMCAオリーフ保育園 園長)

町田Y M C A 25周年

地域に根ざし、着実に活動



東京町田Y M C Aが設立25周年を迎え、8月10日、町田市民フォーラムで「東京町田Y M C A 25周年記念会&東京まちだクラブ・東京コスモスクラブ合同例会」を開催。52人が参加しました。

第1部の記念会では、町田Y M C A活動委員会委員長の榎藤徳彦さんが、「町田Y M C A 25年の歩み」について報告。2003年以降は職員も会館もたないセンターとなったものの、小学生対象の「わくわく実験教室」、高齢者のための「歌声ひろば」や「ベテランテア」といった地域活動を地道に継続してきたことなどを振り返り、



恒例の「東京Y M C A夏まつり」が8月29日に開催されました。時折小雨が降るあいにくの曇り空でしたが、会場は例年と変わらず大賑わい。実行委員長・太田勝人氏の「Y M C Aは楽しい所で

オール東京 夏まつり

今夏も賑やかに開催

す」の挨拶とおり、たくさんの方々の笑顔があふれました。年々腕に磨きのかかる模擬店も子どもコーナーにも行列ができ、終了時刻前に完売となりました。

今年は、にほんご学院の留学生15人が各模擬店でお手伝い。アルバイトで培った接客や調理などの腕を発揮してくれました。また、高等学院やI b y、水泳クラスの子どもたち、清泉女子大学Y M C Aの学生やリーダーなど、「若い店員さんたち」が大活躍でした。益金約50万円は、地域の会員活動ほかY M C Aの公益活動のために用いさせていただきます。

カヤックに乗れたよ！

聖路加国際病院・Y M C Aぐうぐうキャンプ



「第5回聖路加国際病院・東京Y M C Aぐうぐうキャンプ」が7月18日、20日、東京Y M C A妙高高原ロッジ（新潟県）で開催され、幼児から中学生まで25人と保護者7

人が参加しました。このキャンプは、聖路加国際病院形成外科の松井瑞子医師の患者とその家族を対象に5年前から行なっているものです。「入院や手術などで、た

くさんの不安や我慢をしている子どもたちとそのご家族に、笑顔になれる楽しい思い出を作りたい」との松井医師の思いから始まり、聖路加国際病院と東京Y M C Aが共

催、ビザ・ワールドワイド・ジャパン株式会社のご協賛し、それぞれの力を発揮して実施されています。今ではこのキャンプを楽しみにしている子ども達も増え、林間学校と日程が重なったにもかかわらず、遅れて参加した家族もありました。

今年初めて妙高高原で開催し、2日目には野尻湖でヨットやカヤックにチャレンジすることができました。子ども達は生まれて初めての経験に最初はとも緊張していましたが、少しずつ操船感覚を覚えるなど見違えるほど上達し、自由に操船ができるようになり、目を輝かせ満面の笑みで充実した時間を過ごせました。特にカヤックは、日ごろ車椅子に乗っている子どももバランス良く一人で操船でき、保護者も

スタッフも涙を流して喜び合いました。子どもの限らない力、潜在能力の高さを改めて感じることできた瞬間でした。またキャンプ期間中、このぐうぐうプログラムにチャレンジャーを参加者全員から公募し、投票して選定しました。今後、このプログラムのために活用される予定です。また、昨年作ったオリジナルのキャンプソング「ぐうぐうソング」に、新たな歌詞を作ろうと、キーワードを集めました。クリスマスには新たな歌詞が完成する予定です。開催から5年目となり、初回から参加してい

る子どもは中学生となつて、年下の子の面倒を見てくれるほどに成長しました。今後はボランティアアリーダーとして参加できるよう、このキャンプの継続と発展を願っています。

ビザ・ワールドワイド・ジャパン株式会社の社員皆さまには、ボランティアとして献身的なお働きをいただきました。改めて御礼申し上げます。今後もクリスマスやスポーツデーを予定しております。皆様のご理解とご支援をお願いします。（ディレクター 佐藤信也／高尾の森わくわくビレッジ館長）

「地震大国日本において基準地震動を超える地震が大飯原発に到来しないというのは、根拠のない楽観的見通しにしか過ぎない。（中略）当裁判所は、極めて多数の人の生存そのものに関わる権利と、電気代の高い低いの問題等を並べて論じるような議論に加わったり、その議論の当否を判断すること自体、法的には許されないことであると考えている。（中略）本件原発の運転停止によって多額の貿易赤字が出るとしても、これを国富の流失や喪失と言うべきではなく、豊かな国

士に国民が根を下ろして生活していることが、残念ながら米軍機に突くことができないことが国富の喪失である」と（2014年5月、「大飯原発 矢部宏治著の「日本

土に国民が根を下ろして生活していることが、残念ながら米軍機に突くことができないことが国富の喪失である」と（2014年5月、「大飯原発 矢部宏治著の「日本

断を留保する」というものです。これほど米国の支配下にある日本に私たちは住んでいるのかと悲しくなりま

す。敗戦はまだ終わっていないのかも知れません。しかし、大飯原発や高浜原発の判決を見ると、まだまだ司法は機能しているようにも思えます。民意が為政者を動かす国（社会）作りが必要となつてきています。つくば市の総合運動公園整備計画の見直しなどの例は社会が変わりつつあることを感じさせます。（総主事 廣田光司）

なぜ原発を止められないか

運転差止請求事件判決より抜粋、樋口英明裁判長（集英社刊）には、統一人権については関心の低い日本ですが、この判決には人格権が表れて重要で、国家の統治に際する重要な問題として、司法は判決を下さす。（総主事 廣田光司）

シリーズ 資料室の窓から(91)

ワイズ国際大会 裏おもて

齊藤 實 本会元副総主事



熱海市が、ワイズ国際大会開催地となった。75年7月、熱海駅頭の商店街にはじまる全市にワイズの旗が掲げられた。熱海クラブのワイズメン竹内敏朗の日頃の働きが地元で評価されて

いたからである。72年9月17日のワイズ日本区役員会で、区理事奈良吉太良（大阪堺クラブ）は国際大会準備委員会を指名した。奈良信、抱井五郎、藤本博信、坂村友三、竹内敏朗の5名と齊藤實である。その初会合で、国際大会開催手順について日本コンベンションビューローの西川部長を招いて学んだ。何しろ日本初のワイズ国際大会は、海外からの参加者を含む1000名規模の集会である。ホームステイを執拗に求める北欧代表団もある。大会の開催手順の把握が大事であった。

2回目の委員会がHCC（ホストコンベンションコミッティ）役員6名を決めた。こうして、準備会を21回重ねた。その全実行委員が用いた手引書が写真の『国際大会便覧』2冊である。羽田と伊丹両空港、東京・

梅田の西駅に案内所を開いて参加者を出迎えるところから始まるすべての実務手順を実行委員に伝えて不足はなかった。私の手書き原稿のままだ印刷されたものである。印刷業の東京目黒クラブ野畑幸平が作ってくれた。74年1月27日、熱海での第10回実行委員会「その1」を配布、実務分担当が始まる。このように時を駆け知恵を重ねて準備した大会であった。

いよいよ開会である。と、開会礼拝説教者は誰だっけ？聖書が無いよ。てんやわんやの大騒ぎである。この窮地は、日本Y M C A同盟前総主事池田鮮によって救われた。後年、この大会の便覧が示した準備の手際の良さが、韓国区での国際大会準備に反映される。竹内、抱井と私がソウルに招かれたのであつた。